

教員養成制度に関する総合的研究(I)

—小学校教員の資質形成に関する学生の意識—

文教大学教員養成制度研究会

The Study of Educational Systems for a Teachers College.

—The Consciousness of Students about the Teaching Ability of
Elementary School Teachers—

Fujio Gamoh, Takeshi Senzaki, Tadao Ohta, Keiko Hirano, Akio
Fukamachi, Tadao Nakabayashi, Masamitsu Fujiwara.

問題への接近

現行の教員養成は戦後、アメリカ占領軍の勧告によって「開放型」のそれをとっている。戦前は言うまでもなく高等師範や師範学校という専門の学校が主として教員養成にあってきたが、それでは視野の狭い教員が多くなるという批判が起こり、戦後は質の高い人材を教職に集めるための教育以外を専門とする一般大学・学部で教職課程を設置して、そこで学んだものも教員になるというアメリカ式の「開放型」になったのである。

教員養成系大学以外の大学・学部の教職課程のカリキュラムは、教員免許状公布に必要な最低基準単位によって構成されているのが一般で、この「開放型」は、質の高い人材を教職に集め得たかどうか、多に反省されなければならない点である。また見方を変えて教員養成系大学大学の免許状交布も基準単位によるそれであるから、その結果、教育実習にあてられる時間も少なく、中学校2週間、小学校4週間になった(戦前の高等師範や師範学校では一学期にわたって実習がなされていた)。しかも国公立の四年制大学はもちろん、短大卒でも教員の免許状は取得できる

から、事実上、毎年中学や小学校で実際に必要とされる数の数倍に当たる人々が形式的に、また安直に教員免許状を取得している。その結果、多数の実習生が中学や小学校におしかけ、実習指導の現場の先輩教員たちに大きな負担を押しつけているといえる。

このような現状下で昨今、中学生の非行、暴力等が社会問題化する中で、再び質の高い人材を教職へというねらいで、文部省において「教員の養成及び免許制度の改善について」の諮問検討事項が具体的議案として以下のように審議されている。

(諮問検討事項審議用試案)

1. 制度改善の基本的事項

(1) 教員免許状の種類の改訂等について

ア 現行制度では、小学校、中学校及び幼稚園の教諭並びに養護教諭の普通免許状については、大学学部卒業を基礎資格とする1級免許状と短期大学卒業等を基礎資格とする2級免許状の2種類があるが、高等学校の教諭の免許状と同様に新たに大学院修士課程修了を基礎資格とする免許状を設けること。この免許状は、大学院修士課程等修了

を基礎資格とする現行の高等学校の教諭の1級免許状を含めて、上級免許状(仮称)とすること。盲学校、聾学校及び養護学校の教諭についても同様とすること。

これに関連して、すべての学校種別を通じ、大学学部卒業を基礎資格とする免許状については、これを普通免許状(仮称)とし、短期大学卒業等を基礎資格とする免許状については、これを初級免許状(仮称)とすること。なお、免許状の名称については更に検討すること。

イ 新設の上級免許状(仮称)については、普通免許状(仮称)の所有者が所定の教職経験及び大学院相当の現職教育による単位修得をもって、この免許状に上進できるようにすること。

ウ 上級免許状(仮称)を授与する場合には、主たる専攻科目を表示させるものとする。

(2) 免許基準の改善について

ア 修得すべき専門科目及び単位数の改善

教員免許状を取得するために必要な専門科目の最低修得単位数を次のように引き上げるとともに、当該単位数の内訳としては、従来と同様に教科及び教職関係の共通必修科目とその単位数を定めるほか、普通免許状(仮称)及び上級免許状(仮称)については、各大学の創意工夫によって開設する専門科目とその単位数を定めるなど弾力化を図ること。

(ア) 小学校、中学校、高等学校及び幼稚園の教諭並びに養護教諭の免許状について

普通免許状(仮称) 70単位程度

(備考) 現行1級免許状(高等学校は2級免許状)は、学校又は教科

の種類に応じ、44~54単位

初級免許状(仮称) 40単位程度。ただし、高等学校については設けない。

(備考) 現行2級免許状は、学校又は教科の種類に応じ、26~30単位
上級免許状(仮称) 94単位(うち24単位以上大学院で修得する。)程度。そのうち大学院において「学校教育に関する実地の研究」を年間を通して12単位程度修得するものとする。ただし、この12単位については、一定の教職経験(例えば3年)をもってこれに代えることができるものとする。

(備考) 現行の高等学校1級免許状は、66又は76単位(うち20又は22単位以上は、大学院で修得することとなっている。)

(イ) 盲学校、聾学校及び養護学校の教諭の免許状について

普通免許状(仮称) 26単位程度

(備考) 現行1級免許状は、20単位。

初級免許状(仮称) 14単位程度

(備考) 現行2級免許状は、10単位。

上級免許状(仮称) 50単位程度(うち24単位以上大学院で修得する。)及び「学校教育に関する実地の研究」については、(ア)に準ずるものとする。

イ 専門科目及び単位数の改善は、「教職に関する専門「科目」を中心に行うものとする。

この場合、教員を志す者が専門職としての実践的指導力や教育者としての使命感などを身につけることの重要性にかんがみ、これらに関する教育が今後充実されるように配慮する必要があること。

ウ 教育実習については、その単位数の増加を図るとともに、その内容・方法の改善を図ること。

(ア) 実習単位数は、初等教育関係（幼・小）については8単位程度（現行4単位）、中等教育関係（中・高）については6単位程度（現行2単位）に増加するものとする。ただし、特別の事情があるときは、そのうち2単位程度は、これに代わる効果を上げると認められる他の教職専門科目をもって代えることができるものとする。

(イ) 教育実習の内容・方法については、上記の単位数のうち、2単位程度を事前指導に充て、実習校で行う実習前の準備を大学において十分に行わせるものとする。

また、事前指導の内容としては、実習オリエンテーション、学校の観察・参加、教案作成指導などのほか、大学の指導計画の範囲内で、学生が青少年教育施設、児童福祉施設等において行う奉仕活動や社会教育活動、体育、スポーツ活動等において行う指導活動その他の教育的経験を積極的に加味するものとする。

さらに、実習校における教育実習の一部として、専修学校等における指導経験を加えることができるよう検討するものとする。

(ウ) 免許状取得希望者への配慮と、いわゆる教育実習問題の緩和の両面を勘案して、例えば教育実習が未履修であっても他の所定の専門科目を修得している者に対しては、教員免許状取得の予備的資格を証明するような方途を検討するものとする。

一方、大学内では昨年1月に教員養成に対する社会的要請と小・中校教員の需要動向等の見通しの上で、さらに本大学の教育学部の充実と発展の途を模索するため「教育課程検討委員会」が設置され、月に一回の委員会ま

たは小委員会が催されてきている。

当委員会での主な検討事項は

①教員としての専門性を深めるという問題。とくに小学校教員の専門性とは、教科か教職か、さらに複数免許状の取得と、それに対する教育現場の要請との矛盾

②より質の高い教員を養成するための経過として、教員実習の充実、つまり正・副実習の検討とその内容等々。

③現職教員（本校卒業生のケアを主として）の再教育の機関として、さらに教員養成系大学の大学院設置の競合の相関から、また初等・中等教育課程のレベルアップをねらうての大学院の設置。

等々その他学内問題が慎重に検討されつづけてきている。

以上のような大学内外の動向の下で57年「教員養成制度研究会」がスタートしたわけである。

目 的

教育系大学・学部は、一般大学・学部に比して、特定の専門的かつ高度な研究教育を推進させることに関して種々の困難をかかえているといえる。それを小学校教員の養成についてのみ見てみると、とくに学科目が多岐にわたり、特定の専門領域に関する研究教育体制の集中性を欠けるところがあり、研究教育の組織として平板な組織であることは否定できない。

このような組織の中で、広く浅く資格要件を履修させることにとどまりがちであった。多くの場合、小学校教員の養成に関しては、特別な創意工夫のなされることも少なく、多様な教科の様々な知識・技能を断片的に履修させることを余儀なくされ、小学校教員としての資質能力を形成することに関して心要かつ十分な配慮がなされてきたとはいえない。

であるからして、教員養成系大学の制度の見直しや、免許基準の大幅な改訂等々によっ

て質の高い人材を教職へのねらいを全て果たすことができるか。見直しや改訂の必要性は認めるが、解決の全てではなからう。

何故ならば、小学校教員を志望する学生の大学教育に求める姿勢・態度、つまり何を期待して初等教育課程に入学したのか、何を学ぶことを欲しているのか。さらに大学教育は学生の期待や要望にどのように応えているか、応えようと創意工夫をしているか、この実態の把握なくして、質の高い人材を教職へのねらいは果たせないのではなからうか。そこで本報告は、本大学の初等教育課程に在籍する569名の学生を対象として行なった調査の結果の報告である。

方 法

調査対象 この調査では文教大学教育学部初等教育課程の学生を対象に実施した。得られた被験者は、表1に示すように、男子173名、女子396名、計569名であった。なお、調査の実施時期は、昭和58年1月であった。

表1 被験者の内訳

性別 \ 学年別	1 年	2 年	3 年	4 年	計
1. 男	27	45	27	74	173
2. 女	89	83	75	149	396
計	116	128	102	223	569

手続き「教員養成制度に関する総合的研究」をテーマに、教員養成大学で学習している学生を対象にアンケート形式で調査を実施した。調査項目は、フェイス項目として性別、学年、高校卒業後大学入学までの年数、親の職業、クラブ活動であった。また、教師の資質以外に大学進学動機、教育学部を選んだ動機、小学校の教師として望ましいと思われる特性をたずねた。教師の資質としては、教師としての力量、また、国語、社会、理科、算数、家庭科、音楽、図画工作、体育、教師としての一般的資質を、教職としてたずねた。

回答方法は、それぞれの項目ごとにどちら

かといえば希望しないを1点、希望するを2点、強く希望するを3点、非常に強く希望するを4点といった4件法であった。

さらに、大学でそれぞれの教科内容が、どの程度教育されていると学生が評価するかを、前述の各教科ごとにたずねた。回答方法は、それほどなされていないを1、ややなされているを2、かなりなされているを3、非常になされているを4の4件法であった。

結果の処理 高卒後大学入学までの年数の項目は、性と学年のクロス集計であり、親の職業、クラブ活動、大学進学決定時期、教育学部決定時期については、単純集計であり、教育学部志望動機、望ましい教師の特性は、関連する項目から二つを選び出す二肢選択法であった。教師の力量、8つの教科についての大学教育への希望は、性、学年別のクロス集計であった。各教科ごとの大学教育への期待は、「希望値－評価値」でズレを算出し、性、学年別のクロス集計であった。なお、「希望値」は各教科の関連項目の粗点であり、「評価値」は各教科ごとの学生の評定値である。

なお、「教師の力量」、「各教科ごとの大学教育への希望」、「各教科ごとの大学教育の評価」は福島大学教育研究所「所報」第43号別冊でのアンケート項目をそのまま引用した。

結果と考察

I 親の職業 教育学部初等教育課程の学生の親の職業は、教員及び教育関係者が23.2%であり、他大学・他学部と比べてかなり高い傾向がうかがわれる。これは、教員志望動機が親の職業に影響される率が高いことを示す結果である。

II クラブ活動 図1に示すように、体育系サークルが41.1%とかなり高く、サークルに所属していない者が20%低いことは、文教大学教育学部の特徴といえるのではないか。

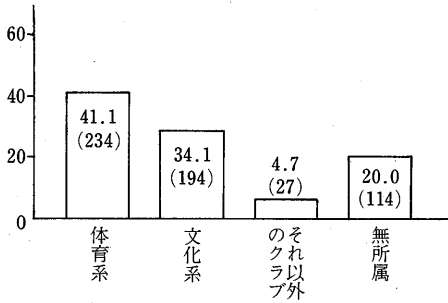


図1 クラブ活動の種類

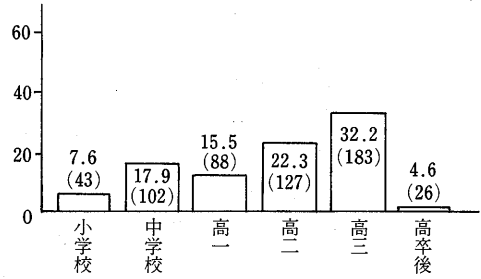


図3 教育学部進学決定時期

Ⅲ大学進学決定時期・教育学部進学決定時期

図2・3が示すように大学進学は、中学校の段階までに73.7%が決定しておりかなり早い時期に漠然とした形で大学進学を希望しているが、教育学部進学を決めるのは、高校3年生といったかなり遅い段階で決めているようだ。しかし、小学校で7.6%、中学校で17.9%が教育学部進学を決定しているのは、注目されよう。

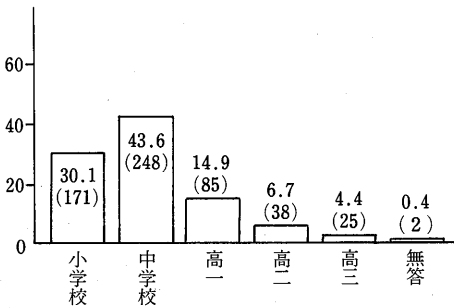


図2 大学進学決定時期

Ⅳ教育学部志望動機 図4に示すように、教育学部を選んだ動機は、「子どもを教えるのが好きだから」22.8%と「自分の性格に合っているから」21.9%の2項目が、他の項目に比べてきわだって高い。この結果は、教員志望をいわば自分の性格的な側面から決定していることを示しているといえよう。「給与の安定」、「親や教師や友達ちに勧められて」などの項目が比較的選択されていない結果からするとかなり自己の生体的な判断から教育学

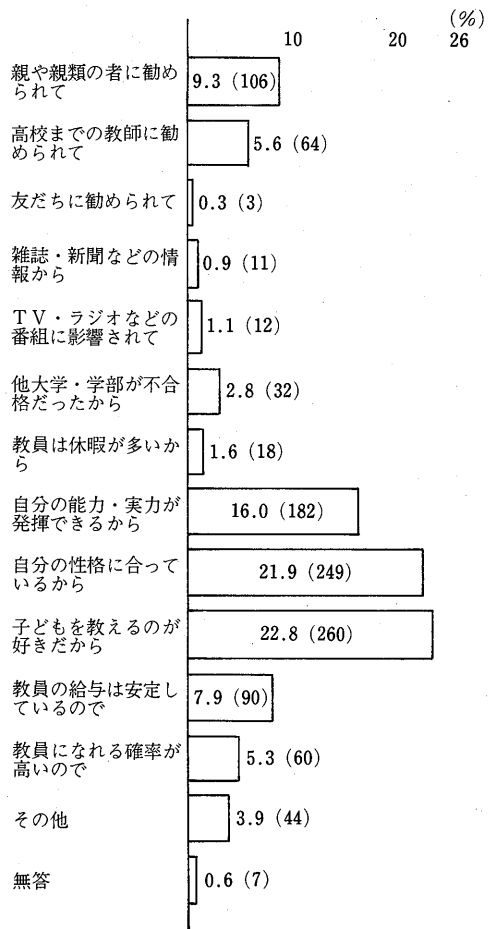


図4 教育学部を選んだ動機 (二肢選択)

部を決定し、子どもへの教育愛が志望動機を中心となっていることがうかがわれる。

V小学校の教師として望ましい特性 性格的な側面から望ましいと思われる教師の特性を見ると、「子どもと遊ぶのが好きである。」が18.5%と最も高く、次で「根気強く努力家である。」が15.6%、「常に冷静で公平な判断が出来る。」が13.5%の順になっている。これらの結果からすると、まず子どもが好きであることが、教師の第1条件であり、次で研究者としての教師の側面を重視していることがうかがわれる。

VI教師としての力量 まず全体として眺めると、児童理解や子どもへの熱意ある対応といった生活指導にかかわる力量がとくに重視されていることが分る。すなわち、①子どもの資質・適性を見抜く力、②子どもの学習状況、悩み、要求、生活状況などを適切に把握する力、④子どもに積極的にかかわっていく熱意や態度の三項目が、それぞれ3.41、3.38、3.39の高得点を与えられている。ついで重要視されている力量としては、⑥わかりやすく授業を展開していく力、③子どもの思考や感情を触発し発展させる教師の表現力、⑩つねに研究・研修にはげむ態度と能力があげられる。生活指導や授業など具体的教育活動に直接結びつく諸能力や態度が、とくに重要視される傾向のあることが読みとれる。反対に比較的重要視されていない項目としては、⑨学校運営全体の中で自己を位置づけ、その立場から考える力、⑮PTAや地域社会の諸活動などに積極的に参加する態度があげられる。日々の具体的な指導、教育活動を、つねに学校全体の中に、そして学校、地域、家庭の三者の関連の中に位置づけて考えるという態度に、やや弱さのあることが、ここで一つの問題点として指摘し得るかもしれない。また、項目⑯の実務処理能力、⑪の教育機器の『操作能力が、それぞれ2.16、2.21とその重要度を低く評価されている。

次に学年差を見てみる。学年差では、1年

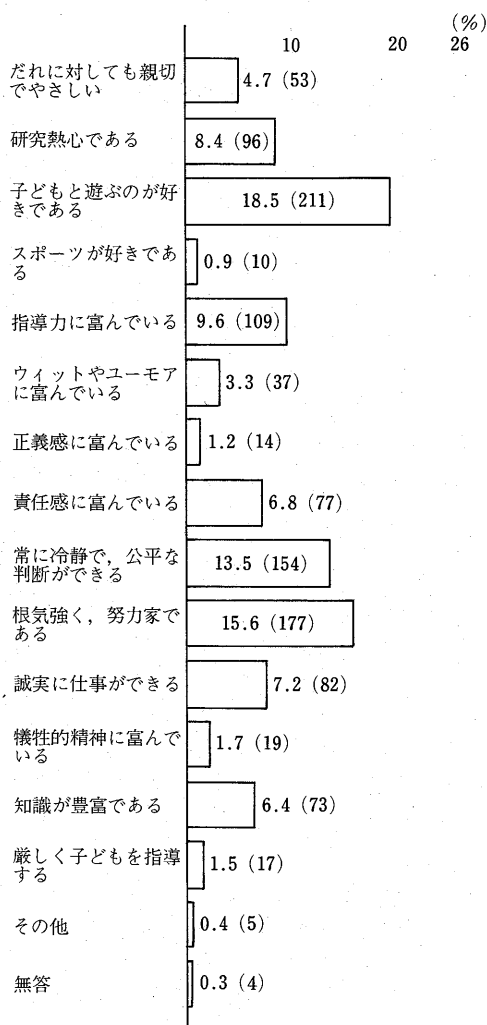


図5 小学校の教師として望ましいと思われる特性 (二肢選択)

と4年の学生の判断に、有意な差が見い出された。全項目の平均は、1年2.59、4年2.81で、その差は5%水準で有意となっている。とりあげられた16項目の力量のすべてに関して、4年の学生の方が、その重要度を高く評価しているのである。

有意差のある項目を見ると、まず項目⑩の研究・研修にはげむ態度と能力に関する評価の差が目される。1年の平均が2.55であるのに対し、4年生は3.27とこの能力・態度の

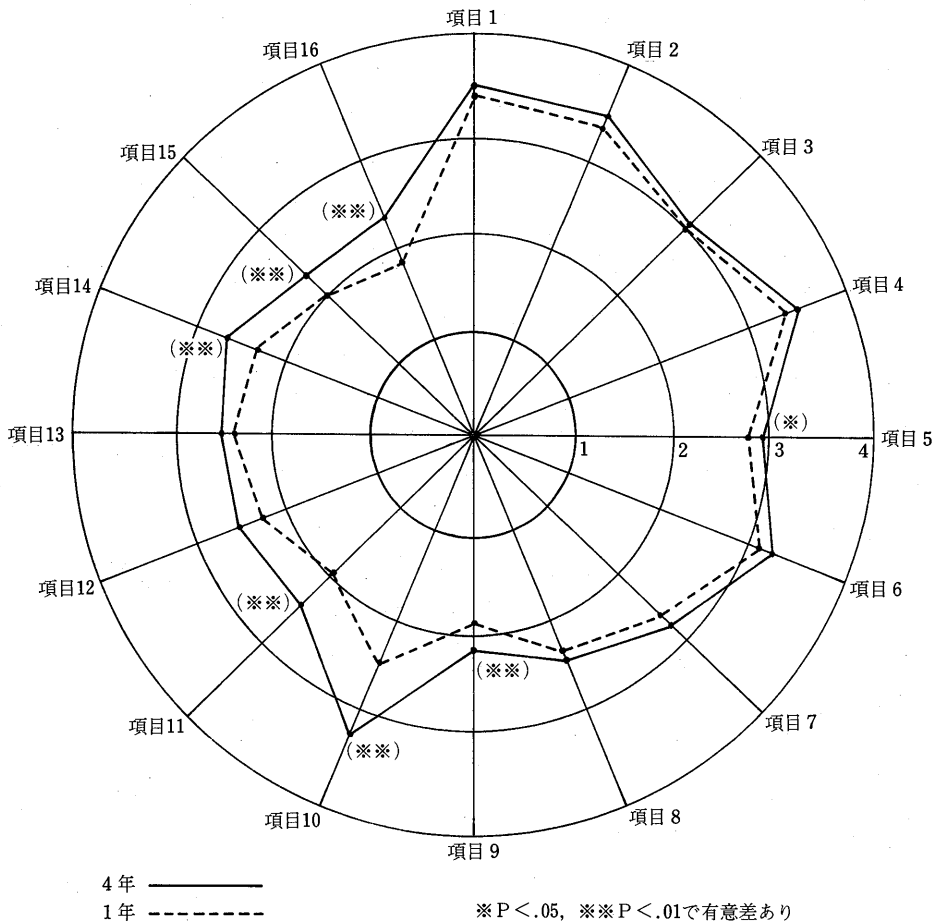


図6 1学年生と4学年生による「教師の力量」の重要度の評価

重要度をかなり高く評価している。この結果は、3年間の大学生活の中で培われた教職の専門職性への認識の深まりを表すものと理解できるかもしれない。広い視野で子どもや学校の問題を考える度量の広さという項目⑤においてもまた、4年生の方にその重要性を強く認識する明らかな傾向が見い出せる。また、学校運営全体への配慮や同僚、PTA、地域との協力関係、教育機器の操作や実務処理能力などを4年生の方が有意により重要なものとしているが、これなどは、最終学年に達した学生達が、教育実践をより具体的に、より身近に感じているとみることもできるだ

ろう。

既述のように、本調査の学生達は子どもが好きで教育学部を選び、子どもと遊ぶのが好きという資質を小学校教員として望ましい特性と考えている。それに呼応して、教師として重要な力量を彼らは、①②④の子どもとの対応関係における能力や態度に置いているのであるが、4年生ともなると研究・研修にはげむ能力をより重視するなど一歩進んだ教職への理解がなされてきているよう思われる。しかしながら、1年と4年の学年差を視覚的に表わした図6を見るならば、教師としての力量に関する認識には、1年と4年とでは量的

表2 「教師としての力量」の重要度

項目内容	学 年					全体
	1年	2年	3年	4年		
1. 子どもの資質・適性を見抜く力	3.43	3.40	3.21	3.50	3.41	
2. 子どもの学習状況・悩み、要求などを適切に把握する力	3.34	3.36	3.35	3.42	3.38	
3. 子どもの思考や感情を触発し発展させる教師の表現力	2.97	2.94	2.94	3.01	2.97	
4. 子どもに積極的にかかわっていく熱意や態度	3.34	3.37	3.41	3.43	3.39	
5. 子どもの問題や学校の問題を広い視野に立ってみることのできる度量の広さ	2.75	2.73	2.77	2.92	2.82	
6. わかりやすく授業を展開していく力(教材のくみため、話し方、板書など)	3.10	3.19	3.18	3.16	3.16	
7. 教科書の中の教材をさまざまな角度からとりあげ指導する力	2.65	2.79	2.67	2.77	2.73	
8. 芸術や文学に対するゆたかな現解と感性	2.42	2.49	2.33	2.47	2.44	
9. 学校運営全体の中で自己を位置づけ、その立場から考える力	1.93	2.02	2.05	2.23	2.09	
10. つねに研究・研修にはげむ態度と能力	2.55	2.68	2.96	3.27	2.93	
11. 視聴覚教材など教育機器を駆使できる技能	2.00	1.98	2.28	2.43	2.21	
12. 教師自身の体育・音楽・図工などの実技能力	2.32	2.38	2.41	2.49	2.42	
13. 教育に関する諸問題を自分なりに理論的に考えることのできる力	2.41	2.59	2.56	2.51	2.52	
14. 同僚などと協力しながら教職員集団の質を高めていく力	2.30	2.41	2.34	2.64	2.46	
15. PTAや地域社会の諸活動に積極的に参加する態度	2.04	2.22	2.11	2.33	2.21	
16. 記録の整理や保管など能率的な実務処理の能力	1.89	2.03	2.23	2.34	2.16	
数字は評価値の平均	2.59	2.66	2.68	2.81	2.69	

な相違を示しつつも、その構造的なパターンにおいてはさほど顕著な差異のないことが注目されるべきかもしれない。ここで同一の項目で現職教員の意識を調査した福島大学調査の結果をみると、(同調査では重要と思われる項目を三つ選ばせるという相対評価の形をとっており、本調査との単純な比較はできないが)、重要視された力量は、項目⑥⑩④②①⑭の順であり、重視されないものは⑮⑪⑧であって、本調査の結果と大むね似通ったものであった。現職教員の抱く教師の力量観とその基本的なパターンにおいて類似した意識を、文教大学の学生達がかなり早い時期から形成していると言えるのかもしれない。

Ⅶ社会 社会教育に対する学生の希望や評価についてまず全体的に考察してみよう。図7に示すように、「児童の多様な考え方を生かした学習指導が出来るような授業方法の研究」が、3.20と最も高く、次で「社会的諸知

識を豊富に身につけること」が2.72、「地域調査を良く行ない教材化できる方法と力量を身につけること」が2.50と、かなり高い得点を示している。これの結果からすると、学生はまず児童を中心とした授業方法の研究に、最も強い関心を示し、そのための方法や技量を身につけたいと望んでいることが、うかがわれる。「社会科のすべての領域を器用にこなす態度や技量」に対しては、あまり関心を持っていない。このことは、社会科の領域は、非常に細分化しており、同時に専門化されているが、小学校段階では、社会生活を中心に基本的ことがらを全体として社会科で扱うことの重要性を学生自身が、気付いている結果を反映しているのかもしれない。

学年別に見ると、「社会的諸知識を身につける」、「地域調査をよく行ない教材化できる方法と力量を身につける」、「教育器機を駆使できる技量」の項目に統計的な有意差が見出されている。社会的諸知識については、4年

項目内容	学年別プロフィール				学 年					評価値 (平均)	
	希望の度合 どちらか といえば 希望しない	希望 する	強く 希望 する	非常に 強く希 望する	1年	2年	3年	4年	危険率		全体
					1年	2年	3年	4年	危険率		全体
(1) 社会科学的な見方や考え方をしっかりもつこと					2.33	2.43	2.38	2.44	—	2.40	1.88
(2) 社会的諸知識を豊富に身につけること					2.72	2.90	2.59	2.07	※	2.72	1.90
(3) 「地域」調査をよく行い、教材化できる方法と力量を身につけること					2.16	2.34	2.75	2.65	※※	2.50	1.76
(4) 教育機器を駆使できる技量					1.96	2.09	2.37	2.51	※※	2.28	1.86
(5) 社会科のすべての領域を器用にこなす態度・技能よりは、何か一つの領域を深めていく態度と力量					1.94	1.73	1.88	1.81	—	1.83	1.69
(6) 児童の多様な考え方を生かした学習指導ができるような授業方法の研究					3.04	3.27	3.27	3.20	—	3.20	2.00
(7) 現実の政治の動きに関心をよせる態度					2.35	2.35	2.23	2.19	—	2.27	1.49

○—○ 1年 ▲---▲ 3年
●—● 2年 ▲---▲ 4年
図7 大学の「社会」教育への学生の希望と評価

生を除く他の学年は、比較的高い希望の度合を示しているが、地域調査、教育器機の使用などについては、学年が高くなるにつれて希望の度合も高くなっている。統計的な有意差こそ見出されていないが、「児童の多様な考え方を生かした教育」については、2年生以上の学年で最も高い希望の度合を示している。学年プロフィールを全体的に考察すると、(2)の項目を除くと学年が高くなるほど社会科教育への希望が高くなっているといえよう。

大学教育への評価について見ると、全体では、希望の度合が高いほど評価値も高いという結果が、うかがわれるが、「希望値」と「評価値」とのズレから考察すると、「児童の多様な考え方は1・2と最も高く、次で「社会的諸知識」が0.82、「現実の政治の動きに関心を寄せる態度」が0.78、「地域調査をよく行ない教材化できる方法と力量」が0.74となっている。このことから考えると、これらの項目について学生達はさらに充実した授業を、大学に期待していると考えること

もできよう。とくに、児童の多様な考え方を生かす授業方法の研究については、学生共々、大学の教師が十分考慮しなければならない課題となる。

VIII 体 育 教員に望まれ資質、力量として考えられるのは(1)~(6)の項目であり、これらは教員にとって重要であると共に常に考慮していなければならない事項である。教員の個性によってその価値観は異なり、福島大学での調査結果からは項目の順位から見ると、(3)、(5)が上位を占め以下(6)、(4)、(1)、(2)の順となった。また男女間での差は(4)の項目の順位であった。学生を対象とした本調査では、現職教員ではスコア差が余り見られなかったのに比べ、差が認められるのと、順位において、(5)、(4)の項目が上位を占め以下(3)(2)(1)(6)の順になった点が異なった。現職が「運動技能に自信を持ち、示範を正しく実施できる力」に関心を持っているのに対し学生は「運動の練習、指導方法を把握できる力」、「体育

項目内容	希望の度合 どちらか といえ ば希望 しない	学年別プロフィール				学 年					評価値 (平均)
		希望 する	強く 希望 する	非常に 強く希 望する	1年	2年	3年	4年	危険率	全体	
(1) 身体や健康、運動等に関して科学的な見方や考え方がしっかりできる力					2.33	2.55	2.49	2.51	—	2.48	2.21
(2) 児童の運動能力や地域の実態をよく調査し、それに適応したカリキュラムを作る力					2.66	2.94	2.79	2.82	※	2.81	1.99
(3) 運動技能に自信をもち、示範を正しく実施できる力					2.62	2.87	2.98	2.81	※※	2.82	2.38
(4) 運動の練習・指導方法を把握できる					2.76	3.11	3.13	3.08	※※	3.03	2.56
(5) 体育の場で協同・公正・責任感・忍耐・規律・積極性等望ましい態度を育成する力					3.09	3.06	2.97	3.05	—	3.05	2.12
(6) 学習指導要領や指導書の内容を研究的にとらえ、児童の運動生活に適切に位置づけて指導実践化できる力					2.42	2.52	2.50	2.46	—	2.47	2.34

○—○ 1年 △---△ 3年
●—● 2年 ▲---▲ 4年

図8 大学の「体育」教育への学生の希望と評価

の場で社会的態度を育成する力」に関心を向けている。体育の場面で社会的態度の育成が必要とすることは共通しているが、学生は指導場面で知識でもってカバーする方向で解決しようとしているのに対し、現職教員では、実践によって解決しようとする傾向が伺える。

本調査の男女の違いに関心の高い順序で見ると(4)、(5)は共通しているが、(3)においては男子の方が必要性を感じている傾向があった。^(注1)筆者らによる他の調査結果においては(3)に該当する事項は女子にその必要性を多く認められ、福島大での調査でも同様な傾向であり、その点が本調査結果の異なるところである。

次に学年別での意識については、(3)の項目を除いて各学年で同様な傾向を示している。意識の高さでは学年間に余り差は認められないが、2年、4年、3年、1年の順に高く(5)、(6)を除けば1年生がかなり低い傾向が伺えた。

(3)の項目は3年生に高い順位を示しているのは前述した筆者らの調査が、3年生を対象としたものでありその結果と一致している。このことは本学において3年次に教材研究の授業が必修として履修され、身を持った体験学習がなされている時期であることを裏付けていると思われる。社会的態度は指導されにくい分野で、具体的な指導法が未確立であり、その場を臨機応変にとらえるべきもので「どの様にして」との疑問から希望の順位も高くなると考えられる。一方示範に代表される実践面においては、場に応じた対応という経験のなさが、それ程急に必要なことと感じていないことに起因するのか、現職とは違った結果となった。

教員に望まれる資質、力量の各項目に対しての評価と希望する項目の間にはズレが生じ、評価において意識の高い順序は、(4)、(3)、(6)、

(注1) 深町明夫 中村忠輔：文教大学における体育科教育の授業に関する研究，文教大学教育学部紀要(4)，1981年

(1), (5), (2)となった。(1), (6)はズレも少なくこの項は希望する順位も下位であり、児童の実態を把握していないと理解しにくい為に関心を示していないのか、現場に入ってからで十分であるとの考えであるかのいずれかであろう。(5)については必要と感じていながらも社会的態度の指導法が抽象的であり、学ぶことより実践を通して解決することと考えていると思われる。希望と評価のズレは男女同じ傾向になっているが、学年間では、2, 4, 3, 1年の順に大きく、1年と2年・1年と4年の間には有意な差が認められる。本学では2年次に体育科教育の講義が、3年次に実技を伴った教材研究が必修で開設されており、それらを履修することによって望ましい授業のあり方や体育に対する意識に反映されるべきであるが、教員側の思惑通りには認識していない節もあるので参考となった。4年生は採用試験等で実技よりも理論を重視してくれるのでその影響が表われたものと思われる。

IX 教 職 この結果の特徴としてあげられるのは、第1に、教師の力量のところでも述べられているように、児童理解に関する希望が強いということである。すなわち、(4)の子どもを見る目や方法の修得に力を入れ、(13)の子どもに関する幅広い知識をもつことがそれぞれ3.29, 3.28の得点を上げ断然他の項目を抜いている。次に特徴としてあげられるのは、「教育の本質」や「教育の現場」についての認識をもつことへの希望が高いことである。これは(1)の教師の自覚と合せて、教師を目ざす者にとっては、子ども理解だけが教職教養ではなく、教育の現状や本質を真に理解することが必要であり、教師の自覚を高めるものだ、という様に本学学生が考えているととらえることができよう。第三の特徴としては、授業技術や教科の専門的な力への希望も強いが、その一方で道徳教育や特別活動への希望も強く、教育を教授という狭い枠でなく道徳、

生活指導も含めて広くとらえているという点である。最後に「授業技術の修得」が2.71であるのに比較し、「指導案の書き方の習熟」が2.16と極端な差が見られることである。これは授業技術と言っても、表面的なものではなく、原理的、本質的なものを求めているのだと解することができよう。

こうした希望が現実の大学教育の中でどう捉えられているかを、同じ項目についてそれほどなされていない(1点)、ややなされている(2点)、かなりなされている(3点)、非常になされている(4点)という4件法で調査し、希望の得点との差を表し、それを学年別に検討した。それによると希望の方が、ほとんどの項目にわたって得点が上回っているが、それは最高の1.08、最低の-0.31であり、全体的に見てその差は少ない。学生の希望をほぼ満たした教職教育が行なわれているといつてよいだろう。

なお、学年別に見た場合、「希望」及び「評価」とも構造的な変化は見られない。参考までに1981年に福島大学が現職教員に行なった調査と比べてみると、得点の高いものは、(1), (2), (3), (4), (5), (9), (10), (11), (13), (14), (15)であり、得点の低いものは、(6), (12)であり、ほぼ一致している。さらに、本学における教職教育は現場の要請にかなり応えたものであると断言することができる。本学学生は大学入学時から、高い教職志望意識を持ち、かつ教職意識を有しているといえよう。言いかえれば、大学入学時から既に「先生」になりきっていると見える。このことの可否は今後大いに論じられる必要があろう。

X 国語、算数、理科、音楽、図工、家庭科

ここでは、社会と体育を除く小学校各教科に関する大学での教育についての学生の希望の傾向について見てみよう。

これらの図から分るように、教師の力量や教職教育のところで指摘されたのと同じ傾向が

項目内容	学年別プロフィール				学 年					評価値 (平均)	
	希望の度合 どちらか といえば 希望しな い	希望 する	強く 希望 する	非常に 強く希 望する	1年	2年	3年	4年	危険率		全体
					2.73	2.84	2.77	2.74	—		2.77
(1) 教師としての自覚や心構えの教育をしっかりと行うこと					2.73	2.84	2.77	2.74	—	2.77	2.60
(2) 授業技術の修得に力を入れること					2.53	2.84	2.80	2.68	※※	2.71	2.37
(3) 教科の専門的な力量					2.48	2.83	2.84	2.78	※※	2.74	2.41
(4) 子どもを見る目や方法の修得に力を入れること					3.21	3.39	3.26	3.28	—	3.29	2.11
(5) 一般教養を深めること					2.87	2.77	2.70	2.75	—	2.77	2.07
(6) 指導案のかき方に習熟すること					2.02	2.32	2.20	2.13	※※	2.16	2.37
(7) 道徳教育の理論を深めること					2.65	2.76	2.59	2.48	※※	2.60	2.26
(8) 特別活動についての理解を深めること					2.47	2.73	2.59	2.60	※	2.60	1.89
(9) 実技面での能力を高めること					2.62	2.80	2.95	2.77	※	2.78	2.38
(10) 教育の本質についての認識を深めること					2.72	2.76	2.77	2.69	※	2.73	2.17
(11) 教育の現状(とくに問題状況)に対する認識をもつこと					2.77	2.97	3.05	2.97	※	2.94	1.65
(12) 地域社会の理解や地域の調査・方法に習熟していること					2.28	2.24	2.52	2.50	※※	2.40	2.07
(13) 子どもに関する幅広い知識をもつこと					3.22	3.32	3.31	3.27	—	3.28	2.067
(14) 社会生活上の一般常識(服装・言葉づかいなど)をきちんと教育すること					2.76	2.56	2.58	2.44	※	2.56	1.98
(15) 大学教師が教育現場を認識すること					2.65	2.72	2.91	2.75	—	2.76	2.19

○—○ 1年 ▲---▲ 3年
●—● 2年 ▲---▲ 4年

図9 大学の「教職」教育への学生の希望と評価

読みとれる。即ち、子どもへの理解や子どもの実態に基づいて教科指導を行なうという項目の得点が高いことである。例えば、図工では、(1)児童の発達段階や一人ひとりの気質・個性に即した作品の見方や指導ができる力、(4)子どもたちをのびのびと活動させ、いつも自由な雰囲気をつくることのできる態度と能力、(6)子どもの表現意欲を促すような助言や話ができて作品の合評などでも児童の感想や意

見をうまく生かす能力がそれぞれ3.19、3.20、3.23と高い点を得ている。同じように国語では、(2)、(3)、(5)が、算数では、(2)、(3)が、理科では、(2)が音楽では、(2)がその他に比べ高い点を得ている。その一方で、教科の基盤とも言うべき専門分野の科学研究の成果に基づいた教科指導や科学研究そのものへの希望が上述の項目より相対的に低いというのが、第二の特徴である。

項目内容	学年別プロフィール				学 年					評価値 (平均)	
	どちらか といえば 希望しない	希望 する	強く 希望 する	非常に 強く希 望する	1年	2年	3年	4年	危険率		全体
	(1) 日本語や言語文化の見方や考え方についての知識や基礎的な理解力					2.23	2.22	2.35	2.17		—
(2) 児童の多様な考え方・感じ方を生かせるための教材についてのゆたかな解釈力					2.97	3.13	3.01	3.04	—	3.04	1.97
(3) 児童の作文や文学作品などから問題を発見したり、感動したりすることができる力					2.81	2.98	2.92	2.83	—	2.88	1.74
(4) 言語学習の心理や言語習得の理論に基づいて学習活動を組織することができる力					2.17	2.30	2.28	2.35	—	2.29	1.82
(5) 児童の実態を配慮しながら、たえずすぐれた教材とは何かを志向する意欲					2.22	2.54	2.48	2.66	※※	2.51	1.79
(6) 学習指導要領や指導書の内容を研究的にとらえ国語科の目標・構造をふまえて指導できる力					2.04	2.45	2.17	2.32	※※	2.27	2.23

○—○ 1年 ▲---▲ 3年
●—● 2年 ▲---▲ 4年

図10 大学の「国語」教育への学生の希望と評価

例えば、算数では、(1)の「算数教材を数学の専門的な立場や数学史的な立場からとらえることのできる力」は、(2)の「児童関心をとらえ、教材の展開に工夫を加えることができる力」に比べ、ポイントで1.18も低い。このような傾向は、理科の(1)、(3)と(2)の間で図工の(1)、(4)、(6)と(5)の間で、国語の(2)と(1)の間でも見られる。学生の教科指導への関心が、実践的な部分にかたよるということは、本学だけではなく今日の教師養成教育の問題点の一つであろう。しかし、このような傾向は現職教員の中にもみられ(図16, 17)、教師養成教育だけではなく教育会全体の問題とも言える。

要 約

本研究は、小学校教員の資質形成についてできるだけ総合的にとらえることを、主な目的とした。調査対象は、文教大学初等教育課

程に在籍する569名の学生であった。得られた結果を概略すると以下の通りである。

教育学部を選んだ理由と決定時期について見ると、決定時期は高校3年が最も高い、小学校・中学校の段階で約25%の学生が教育学部進学を決定していたことは、注目にあたいする。教育学部志望動機は、「自分の性格に合っているから」、「子どもを教えるのが好きだから」といった項目が多く選択されていた。

小学校教師として望ましい特性については、「子どもと遊ぶのが好き」、「根気強く努力家である」、「冷静で公平な判断ができる」といった特性を多く選択しており、教師の特性として、教育のみならず研究的な側面を、重視している傾向がうかがわれた。

教師としての力量については、児童理解や子どもへの熱意ある対応といった生活指導にかかわる力量が、特に重視されていた。つまり「子どもの資質・適性を見ぬく力」、「子ど

項目内容	希望の度合 どちらか といえば 希望しな い	学年別プロフィール				学 年					評価値 (平均)	
		希望 する	強く 希望 する	非常 に強 く希 望す る	希 望 す る	1年	2年	3年	4年	危険率		全体
(1) 算数教材を数学の専門的な立場や数学史的な立場からとらえることのできる力					2.03	2.16	1.88	2.09	—	2.06	1.89	
(2) 児童の関心をとらえ、教材の展開に工夫を加えることができる力					3.31	3.35	3.15	3.19	—	3.24	1.82	
(3) 児童の理解能力に対応して、カリキュラムを弾力的に運用できる力					3.05	3.27	2.97	3.02	※	3.07	1.72	
(4) 自ら新しい教材・教具を開発していける力					2.19	2.33	2.38	2.68	※※	2.45	1.56	
(5) 学習指導要領や指導書の内容を研究的にとらえ、算数科の目標をふまえて指導できる力					2.31	2.51	2.22	2.30	※	2.34	2.30	

○—○ 1年 △—△ 3年
●—● 2年 ▲—▲ 4年

図11 大学の「算数」教育への学生の希望と評価

もの学習状況などを適切に把握する力」、「子どもに積極的にかかわっていく熱意や態度」などが重要視されていた。学年差について見ると、1年生と4年生の間に構造的なパターンには、さほど顕著な差異は認められないが、量的な違いが見い出された。つまり、4年になると研究・研修にはげむ能力をより重視するなど一歩進んだ教職への理解がなされるように思われる。

社会科については、「児童の多様な考え方を生かした学習指導ができるような授業方法の研究」、「社会的諸知識を豊富に身につけること」、「地域調査をよく行ない教材化できる方法と力量を身につけること」などが相対的に高く望まれていた。これらの結果は、学生達はまず、児童を中心とした授業方法の研究に最も強い関心を示しその為の方法や技量を身につけたいと望んでいることがうかがわれる。学年別に考察すると学年が高くなるほど社会科教育全体への希望が高くなっているといえよう。社会科教育の評価値について検討すると児童の多様な考え方を中心とする大学の教育に最も高い関心を寄せているが、現実

の大学教育の中ではその希望が十分叶えられていないと評価しているようである。

体育については、「運動の練習・指導方法を把握できる力」、「体育の場で社会的態度を育成する力」に強い関心を向けていることがうかがわれる。この結果を福島大学の現職教員を対象とした調査結果と比べると多少の違いが認められる。つまり、体育場面で社会的態度の育成を必要とすることは、共通しているが学生は指導場面を知識によってカバーする方向で問題を解決しようとするのに対し、現職教員では実践によって解決しようとする傾向がうかがわれる。学年別に検討した意識差では、学年間にあまり差は見られないとは言え、2年、4年、3年、1年の順の意識の高さを示している。3年生は相対的に低い得点であるにもかかわらず、「運動技能に自信を持ち、示範を正しく実施できる力」が他学年に比べて高いとする結果は3年次に体育教材研究の授業が集中しているという本学のカリキュラム構成が反映されている結果とも考えられる。また、社会的態度は指導しにくい分野で、具体的な指導方法が未確立であり、

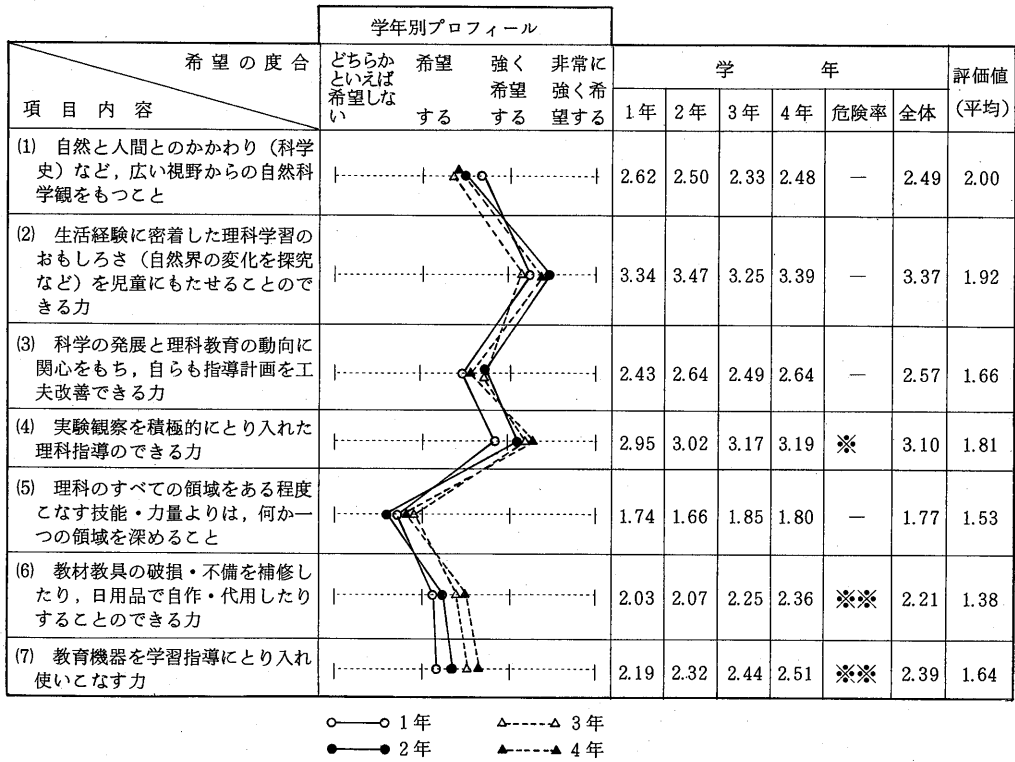
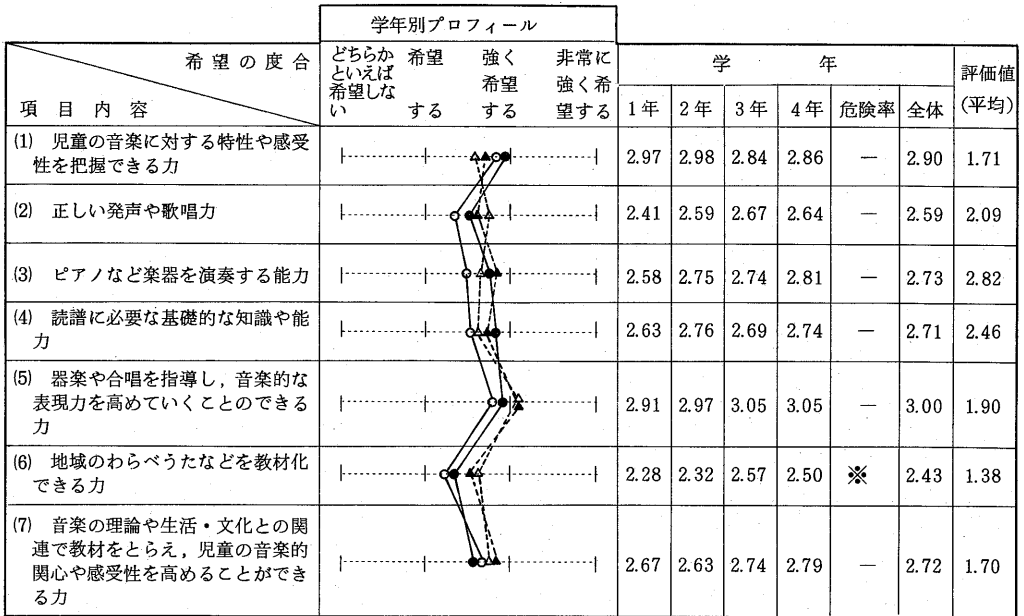


図12 大学の「理科」教育への学生の希望と評価

その場を臨機応変にとらえるべき領域であるため学生にとって、どのようにして指導したらよいかといった疑問から大学の体育教育への希望が高くなったとも考えられる。「希望値」と「評価値」とのズレについて見ると、「運動の練習・指導方法を把握できる力」、「運動技能に自信を持ち、示範を正しく実施できる力」に高いズレが生じている。本学では、2年次に体育科教育の講義が、3年次に教材研究が、開設されているが教員側の思惑通りに学生は認識してくれていないのかもしれない。

教職については、教師の力量のところでも述べられたように、児童理解に関する希望が強くみられた。つまり、「子どもを見る目や方法の修得」、「子どもに関する幅広い知識」などに他と比べ高い得点が与えられていた。

また、次の特徴として、「教育の本質の認識」、「教育の現状についての認識」にも高い希望が認められた。また、授業技術や教科の専門的な力への希望も強いが、一方では、道徳教育や特別活動を重視する傾向もうかがわれた。これらの結果は、子どもを中心に、より原理的・本質的な側面から教職科目をとらえようとする意識を強く持っている結果だと言えよう。「希望値」と「評価値」とのズレから検討すると全体的に見てその差は少ない。この結果は、教職に関する授業がほぼ学生の希望を満たしているということもできよう。しかし、1年生の時から高い教職意識を持ち、既に、「先生」に成りきっていると思われる現状は、今後多くの課題を残していると言えよう。



○—○ 1年 △---△ 3年
●—● 2年 ▲---▲ 4年

図13 大学の「音楽」教育への学生の希望と評価

附 記

本研究は、文教大学教育学部共同研究の援助の基に実施された。共同研究員は、蒲生不二男・仙

崎武・太田忠男・平野恵子・深町明夫・中林忠輔・藤原正光であり、「文教大学教員養成制度研究会内（代表 蒲生不二男）の名のもとに作成した。

項目内容	学年別プロフィール				学 年					評価値 (平均)	
	希望の度合 どちらか といえば 希望しない	希望 する	強く 希望 する	非常に 強く希 望する	1年	2年	3年	4年	危険率		全体
					1年	2年	3年	4年	危険率		全体
(1) 児童の発達段階や一人ひとりの 気質・個性に即した作品の見方や 指導ができる力					3.13	3.16	3.29	3.20	—	3.19	1.64
(2) 絵や彫塑(立体)やデザイン、 工作について、それらの技法を全 般的によく修得していること					2.30	2.63	2.78	2.70	※※	2.62	2.10
(3) 設備や道具の管理が几帳面で、 作品の保管や展示などもきちんと 行うことができる力					2.02	2.94	2.16	2.15	※	2.08	1.49
(4) 子どもたちをのびのびと活動さ せ、いつも自由な雰囲気をつくる ことができる態度と能力					3.28	3.19	3.15	3.19	—	3.20	1.73
(5) 美術史にもよく精通し、美術、 工芸、建築など図画工作に関連し た知識が豊かであること					1.92	2.04	2.16	2.09	—	2.06	2.02
(6) 子どもの表現意欲を促すような 助言や話ができ、作品の合評など でも児童の感想や意見をうまく生 かす能力					3.21	3.28	3.20	3.24	—	3.23	1.62
(7) 教育全般の新しい動向に気を配 り、いつも斬新な内容や指導法を 授業に生かしていく態度					2.37	2.33	2.43	2.48	—	2.41	1.63

○—○ 1年 △-----△ 3年
●—● 2年 ▲-----▲ 4年

図14 大学の「図画工作」教育への学生の希望と評価

項目内容	学年別プロフィール				学 年					評価値 (平均)	
	希望の度合 どちらか といえば 希望しない	希望 する	強く 希望 する	非常に 強く希 望する	1年	2年	3年	4年	危険率		全体
					1年	2年	3年	4年	危険率		全体
(1) 最新の科学的研究成果を、児童 の理解能力に応じて教材に適用さ せる指導力					2.14	2.20	2.18	2.19	—	2.18	1.57
(2) 被服製作や調理の技術の要点を とらえ、それを児童に体得させる 指導力					2.63	2.71	2.83	2.62	—	2.68	2.12
(3) 地域および家庭における児童の 生活実態をつねに的確に把握する 態度と能力					2.57	2.45	2.55	2.64	—	2.57	1.58
(4) 学習指導要領や指導書を研究的 にとらえ、児童の家庭生活に適切 に位置づけて指導実践化できる力					2.41	2.56	2.41	2.42	—	2.45	2.06
(5) 家庭生活経験をゆたかにし、そ の経験を生かして総合的に生活指 導をする実践的能力					2.83	3.03	2.83	2.88	—	2.89	1.83

○—○ 1年 △-----△ 3年
●—● 2年 ▲-----▲ 4年

図15 大学の「家庭」教育への学生の希望と評価

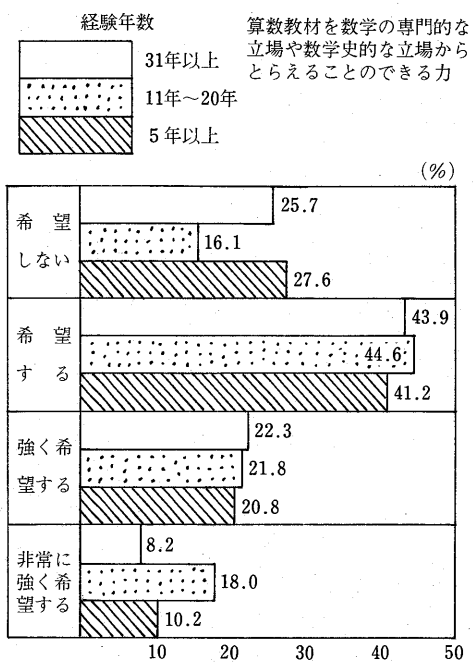


図16 Q₁-算数-(1)

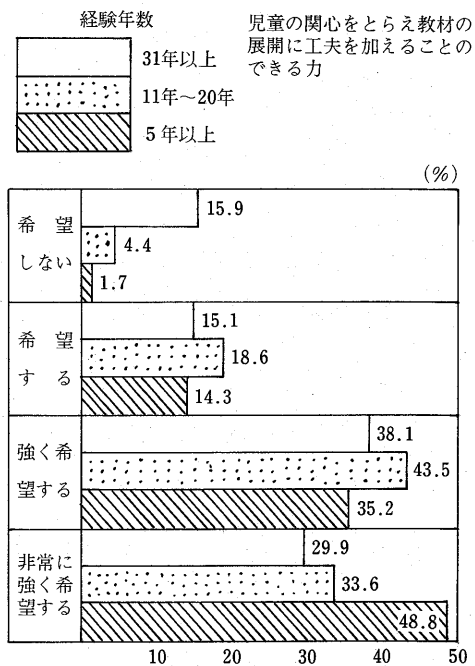


図17 Q₁-算数-(2)